

覇権交代5

李舜臣の亡霊

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

| | |
|------------|-----|
| プロローグ | 13 |
| 第一章 勝利条件 | 27 |
| 第二章 衛生兵 | 43 |
| 第三章 密航 | 71 |
| 第四章 旭日旗の男 | 100 |
| 第五章 イソロク作戦 | 126 |
| 第六章 ハプニング | 155 |
| 第七章 猛将再び | 181 |
| 第八章 香港へ | 205 |
| エピローグ | 221 |

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易されている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引く張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

い い かける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

み どう そう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：
ボーンズ。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：
ニードル。

おだぎりしよう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。
ス。

あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：
ダック。

あかばねたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：
ム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまひひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉
の同期。

〈水陸機動団〉

しばひかる
司馬光 水陸機動団教官。香港に潜入して、本土派と接触している。

うえぞのひろき
上園広樹 陸将補。水陸機動団長。

はかまだてるお
袴田輝男 一佐。水陸機動団幕僚長。

むなかたしん
宗像晋 二佐。第一水陸機動連隊第二中隊長。

いわながはまれ
岩永誉 一尉。第一水陸機動連隊第二中隊第一小隊を率いる。

たつむらしげと
達村茂人 曹長。岩永誉一尉の女房役。

さかさばらけいすけ
榊原啓介 三曹。地元は九州。

〈第一ヘリコプター団〉

むらたもりと
村田護人 三佐。村田家次男。

むらたりんこ
村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

〔西部方面隊〕

はむろやすのり
葉室泰徳 二佐。西部方面隊西部方面ヘリコプター隊の副隊長。村田
護人三佐が教育部隊を出てはじめてUH-1汎用ヘリの操縦棒
を握った時の上官。

わじまみずえ
和嶋瑞恵 一尉。CHのベテラン機長。

〈海上自衛隊〉

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさ や
高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめ や とし お
染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかお と
板東兼人 一佐。"かが"、艦長。

かおきか
兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

ふじわら みさ
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36Aのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕

ごみ いき み
五味勇美 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

えがわ とし き
江川俊樹 海将補。

たけうち こうすけ
竹内幸輔 一佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦"ほうしょう"〕

いずみ だ せん えい
泉田宣泳 一佐。艦長。

はしぐち はじめ
橋口肇 二佐。副長。

みやぎ あす か
宮城明日香 一尉。気象班長。

〈航空自衛隊〉

〔二〇二飛行隊〕

むらた まさと
村田先斗 二佐。F-35Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

〈統合幕僚監部〉

こいそ こより
小磯小代里 統合幕僚監部参事官付国外運用班長。青柳睦己と岩倉久彌を尻に敷く督戦隊の官僚三人組の一人。制服組からは蛇蝎の如く嫌われている。

〈防衛装備庁〉

しまぎ さつ し
島崎蒼士 技官。航法援助のシステム開発を行う若手。

〈海上保安庁〉

うがき いし りょう
宇垣詠志朗 二等海上保安正。"なつぐも"、艇長。

いしばし だいすけ
石橋大介 三等海上保安正。"なつぐも"、副長兼機関長。

うめ の ゆきよし
梅野征悦 二等海上保安士。"なつぐも"、レーダー担当。

《内閣府》

こが はじめ
古賀肇 内閣府政策統括官（経済財政運営担当）。

《内閣官房》

あおやぎむつ き
青柳睦己 内閣安全保障・危機管理室室長補佐。若手防衛官僚のホープだが、慎重派。海南島上陸作戦にも反対していた。

《外務省》

いわくらひさや
岩倉久彌 総合外交政策局安全保障政策課課長補佐。北米課が古巣。自ら国務省霞ヶ関出張所と自嘲するほどの対米従属派。

〔吉野ヶ里〕

もり た こう たろう
盛田浩太郎 吉野ヶ里中学校の校長。

しらかせい と
白崎征途 吉野ヶ里中学校の教頭。

かはら さ や
華原沙也 吉野ヶ里中学校の音楽教師。

ムンヒョジョン
文暁庭 韓国から交換留学で吉野ヶ里中学校が受け入れていた若い教師。九大に留学していた。

はむつばき
葉室翼 吉野ヶ里中学校の新聞部部长。

えだの きみえ
枝野君枝 吉野ヶ里中学校の新聞部員。玄武ミサイルで軽傷を負う。

うがきいみ
宇垣詠美 記者。地元新聞社の入社三年目。全国紙を落ちて地元新聞社に就職。佐賀出身で宇垣詠志朗二等海上保安正の妹。

さわいめぐ
澤井芽俱 インターネット・メディア会社の編集者にしてライター。
“ゆう君ママの戦場リポート、を配信している。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〔ソウルアメリカ大使館〕

ロバート・Ｂ・ワイズナー 大使。元太平洋軍司令官（海軍大将）。

コーディ・Ｒ・キム 政務官。国務省のキャリア外交官で、ワイズナーが韓国へ赴任する時、自ら指名してソウルに連れてきた人物。

〈海兵隊〉

セリーヌ・Ｄ・タッカー 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

〔第三海兵遠征軍〕

ウェイン・Ｒ・ヴァンペルト 中将。第三海兵遠征軍司令官。海南島攻略作戦の指揮をとる。

グレン・ギャレス 少将。参謀長。

キャスリーン・アイザック 中佐。航空参謀。F-35Bのパイロット。

〔第三海兵師団第三偵察大隊B中隊〕

アルベルト・タイラー 中尉。第三海兵師団第三偵察大隊B中隊
フォース・リコーン
武装偵察隊を指揮。

エイベル・リンカーン 曹長。アルベルト・タイラー中尉の女房役。

グレイグ・フィリップス 伍長。

中国

《中央弁公庁》

ファンジュエマオ

範 学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

チョアリイ

賈 礼 日本の中国大使館経済処参事官。

〈陸軍〉

〔海南島独立守備隊〕

マオアイトン

毛愛軍 少将。海南島独立守備隊を率いる。出世や賄賂とは無縁な軍人生活を送ってきた、ゲリラ戦研究の第一人者。

ホアンクアンイン

黄冠英 大佐。作戦参謀。

〔第一〇一待機旅団〕

リンカン

林剛 大佐。これまでの功績により昇進し、新たに第一〇一待機旅団の指揮をとることになった。

シイモン

石萌 中佐。ハワイでの戦いにおいて情報参謀として素晴らしい働きをみせて中佐に昇進し、部隊を率いることになる。

スットン

蘇桐 中佐。情報参謀だったが、石萌が参謀長役を固辞したため参謀長に昇進。

〔第22連隊〕

チイエホンタマ

銭宏大 中佐。第22連隊政治将校団副隊長。

ホウワイエ

侯燁 少佐。銭の部下。

大韓民国

《国家情報院》

リュージュニ

柳珍熙 副長官。

チジュンユル

池俊烈 中佐。副理事官。

ホンウンソン

洪應善 韓国大使館参与の肩書きをもつ。融和委員会のメンバー。

〈空軍〉

〔第11戦闘航空団〕

ソンギョング

孫庚泰 少将。航空団を指揮する。

オキョング

呉京周 中佐。第112戦闘飛行隊を率いる。

ビョングンミン

辺光敏 少佐。飛行隊の副隊長。

〈海軍〉

キムジンイル

金真一 少将。韓米同盟艦隊司令官。

〔海軍第五戦団〕

オムジョンウオン

嚴鐘元 大佐。参謀長。

ナムジフン

南智勲 少佐。金寿鉉、艇長。

チャンイルジェ

張日載 大尉。副長。

〈海兵隊〉

ソンジュウオン

孫周原 少将。海兵隊部隊を率いる。

クンヒョサン

斤孝相 大佐。

バクミンア

白珉台 中佐。第二三四海兵予備役中隊を率いる。元は韓国最大の軍事顧問会社の中東派遣部隊を率いていた。

チヨンデウン

鄭大恩 少佐。副隊長。

〔第二海兵師団〕

ユンベクヨン

尹白龍 大佐。第二海兵師団第二戦車大隊を率いる。

///シンガポール///

クー・シェンロン 国防大臣。若く野心家で知られる男。夫人は香港人の民主運動家である姚芳芳。

ウン・テクバ 外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

〈海軍〉

ゴー・チョク・テオ 大佐。

覇権交代5

李舜臣の亡霊

プロローグ

海南島・加來空軍基地——。

海南島の玄関口、海口市に近いこの基地を、米

海兵隊はほぼ無傷で占領した。

破壊された滑走路を復旧するため、陸自部隊が

陵水基地から山岳部を横断して補給物資と施設

部隊を投入し、占領翌日には滑走路が復旧。日中、

ひっきりなしに輸送機が飛来し、数千トンの補給

物資を基地内に置き、また飛び去っていった。

探りを入れてくる人民解放軍部隊との間に小競

り合いはあったものの、基地は比較的平穏だった。

その夜、海兵隊本隊は僅かの守備部隊を残し、

海口市への前進を開始した。

補給物資を運んできた陸自部隊は暗くなるまで基地内に留まった後、お役御免という形で陵水基地への帰途につく。それは、海口市攻略は海兵隊だけでやり遂げたいので自衛隊の援護は不要だということもあつた。

だが、基地の守りを固めきらないうちの攻撃で状況は暗転する。中国軍が昔掘ったトンネルを利用して、突如基地内に現れ、残っていた僅かの守備部隊に奇襲をかけたのだ。同時に、滑走路脇のエプロンに積み上げられた補給物資に次々と火を点けて回った。

陵水基地へ帰投中の自衛隊がただちに引き返す

も、海兵隊は潰滅状態となっていた。ドラム缶をひっくり返したようなスコールも降りをはじめている。

雨が上がるのを待ち、自衛隊は陵水基地から出撃させたヘリボーン部隊を基地の外れに展開させた。

解放軍は雨が上がり切る前に、韓国軍海兵隊の戦車部隊を突っ込ませたが、自衛隊部隊はトンキン湾側から上陸してきた陸自戦車部隊に、危機一髪のところまで救われた。

夜明けはまだ遠く、基地から遠く離れた場所では引き返そうとした海兵隊本隊が足止めする解放軍相手にまだ戦っている。だが天候が回復し、上空に味方の武装ヘリが現れたことで、解放軍は不利を悟り、またトンネルを使って潮が引くように撤退していったのだ。

韓国軍戦車部隊も、再び闇の中へと消えていっ

た。

陸上自衛隊・特殊作戦群隷下の第一空挺団第四〇三本部管理中隊、その実特殊部隊の〈サイレント・コア〉を率いる十門康平^{ともんこうへい}一佐は、地表付近に溜まっている水蒸気が晴れて武装ヘリのセンサーが完全に機能するようになるまで、いかなる部隊も基地内に立ち入ることを禁じた。

どこに敵が潜んでいるか、ブービー・トラップを仕掛けているかもわからないからだ。

できればこのまま、基地の外で夜明けを待ち、明るくなってから状況を把握するのがベターだと考えていた。

しかし、陵水基地から陸自ヘリに同乗してきた海兵隊の武装偵察部隊^{フョイスリスリゴン}一個分隊がさっさと基地内に入り、すぐ応援を遣すよう要請してくる。その応援はしかし、戦闘部隊ではなく、メディックを大量に寄越してくれというものだった。

土門はやむなく原田はらだ小隊を防御陣地から出し、フォース・リーコンの後を追わせる。ただし、上空にドローンを飛ばして周囲を監視させながらだ。地面は、そこら中に水たまりができています。榴弾でも置いてあったら、気づかずに蹴飛ばしてしまふほどの深さだ。

側溝には、洪水のように濁流が溢れている。幸いなこととしては、豪雨によって兵士たちの夥おびただしい血も綺麗に流されたことだろうか。

小隊長の原田拓海たくみ一尉は、ヘッドランプやマグライトの使用を許可し、横に散開して前進した。

数時間激しく敵と撃ち合った場所には、多数の戦死者が横たわっている。奇妙なのは、全員が仰向けに寝かされていたことだ。

戦死者全員、それなりのトリアージを受けた形跡もある。死亡、もしくは不処置を意味する黒いタグがタクティカルベストの胸の辺りに留めてあ

ったのだ。

最優先治療を意味する赤いタグが留められた兵士もいたが、彼らは全員、すでに死んでいた。この豪雨で半数は溺れ死んだと思われる。

それらの遺体も、可能な限り戦場から後方へ下げようとした痕跡が窺えた。

海兵隊の負傷兵もいる。海兵隊員たちは、様々な建物の中に集められ、トリアージと初期治療を施されていた。

原田はそうした管理棟の一つからいったん外に出ると、土門を呼び出した。

「こちら、コハラ——。マウナケア、応援が必要です。とりわけ通訳が」

「北京語ペキンが今必要なのか」

「負傷兵の治療に必要なんです。彼らの尊敬を得られれば、トンネル作戦の概要を教えてもらえるかもしれません。それに、米兵の生き残りも大勢

います。外交官やネイティブ並みの英語力をもつ官僚たちにも来てもらえたら助かります」

「車両を動かせということか。そこら中に死体が転がっているんだらう？」

「掃除はしておきますよ。フォース・リーコンのタイラー中尉は、かき集められるだけの車両で基地内を搜索し、負傷兵を探してほしいと言っています。ほとんど懇願こんがんに近いですね。これは外交官の意見を聞いた方がいいでしょう」

聞くまでもない。米側のご意向は、忖度そんたくして先に動けというのが外務省のモットーだ。

「それは、水機団長に任せよう。車両部隊も上陸しているから。ひとまずそっちへ向かう。マウナケア、アウト——」

サイレント・コアのブッシュマスター指揮車のキャビンには、今は六人が乗っていた。

原田小隊のIT担当でドローンの操縦もこなす

ガルこと待田晴郎まちだはるお一曹が運転席背後の右側オペレーター・シートに、その背後のモニターが見やすい場所に土門が陣取る。

後部ハッチ側には、民間人であり北京語通訳、そして今やここ海南島にいる唯一の日本人従軍記者である澤井芽俱さわいめぐ、その左側に女辻参謀と恐れられる統合幕僚監部参事官付国外運用班長の小磯小代里こいそこより、外務省総合外交政策局安全保障政策課課長補佐の岩倉久彌いわくらひさや、そして防衛省から出向中の内閣安全保障・危機管理室室長補佐の青柳睦己あおやぎむつきの順で並ぶ。

慎重居士こじの青柳は、将来の防衛事務次官と目される小磯に顎あごで使われる立場だ。一方、岩倉の方は従米ポチのしと罵られるが、外務省北米課のエリアートである。

数日前の戦闘で、小磯は耳を、岩倉は右手の甲を撃ち抜かれたため、本来ならとくに本国に戻

り治療に専念しているはずだったが、官僚の意地でまだここに留まっていた。

戦闘準備を命じた土門は、味方の誤射を避けるためにフォグランプを点して部隊を前進させた。車列は、ブッシュマスターやLAV-2装輪装甲車から編成されている。

ブッシュマスターはハワイで確保した車両だが、LAV-2はここ海南島で海兵隊から提供されたものだ。ルーフには、それぞれ交換可能な擲弾やM2重機関銃の銃座が設けられている。

基地沿いの集落に潜んでいた車両部隊は、基地に入る何本かの側道から原田が呼んだ場所へ、林や溜め池の横を抜けながら移動した。

暗視ゴーグルで覗くと、溢れそうになっている溜め池の水面には、戦死者の遺体が浮き沈みしていた。

激しく撃ち合ったエリアを過ぎて建物が見えて

くると、車列は途端に動けなくなる。あちこちに死体が転がっているのだ。それを退かすのは、簡単なことではなさそうだった。

挙げ句、道の中央で原田が跪ひざまずいて負傷兵の手当をしていた。しかもその負傷兵は、海兵隊員ではなく中国兵だ。

土門は「やれやれ……」と首を振ると、車列に停止を命じた。

「ガル、警戒を怠るな。またいつ敵が地下から這はい出してくるかもわからん」

ブッシュマスターを降りて近づくと、水たまりに沈む負傷兵の側で原田が屈み込んでいる。

「無事なマリッコはいたのか」

「はい、この辺りにもいました。その建物が基地の警備隊司令部の当直用宿泊所らしく、米兵と中国兵が担ぎ込まれています。担ぎ込んだのはわれわれではなく、解放軍のようです」

原田は、兵士の下にスクープストレッチャーを突っ込もうとしていたようだ。四分割されたストレッチャーで、地面や床に倒れた患者を無理に起こすことなく、ストレッチャーを背面に差し込むことで固定できる優れものである。

「そいつ、助かるのか？」

「救命の価値はあります。手伝ってください」

「もう一度聞くんが、米兵は全員収容したんだな」

「はい。フォース・リーコンが踏み込んだ時には、戦死者を含めて室内に安置してあったそうです」

ここで澤井が現れると、水たまりの上に膝を突き「お手伝いします！」と申し出た。

「ありがとうございます。話しかけてください。さっきまでは意識があつたんですが、脈がなかなかとれない」

ストレッチャーを背中と地面の間に差し込んで固定すると、原田は輸液パックの注射針で血管を

探した。

「隊長、見てください。この左足の止血帯。ターニケットを止めたストラップの上に、止血した時間がズルー・タイムで書き込んである。その下にはまだ余白があつて、この措置をした衛生兵は、たぶん戻ってきて様子を見られると思つていたんでしよう。戦闘服の膝を、ハサミで切りかけたあともある。措置中に攻撃が激しくなつて、この場を離れたのか……。このターニケット、水機団で使っている物より新しい。うちほどじゃないけど、普通科部隊のそれより二世代は新しいな」

澤井が顔を近づけて声をかけているが、反応は無い。ただ、呼吸はしているようだ。

酷い土砂降りの中で、水たまりが何度も顔を洗つたらしく、迷彩ドーランを塗った顔には小枝や葉っぱが張りついていた。澤井はそれを優しく拭いている。

土門はしゃがんで、ターニケットに結ばれたトリアージ・タグを見た。最優先治療を意味する赤いタグが付けられている。

「つまり敵は、敵味方の区別無く公平に負傷者を扱い、トリアージし、治療し、豪雨に備えて屋内にまで運び入れたということか」

「そうですね。もつとも、あの豪雨では戦闘どころではなくまりましたので、それしかできなかつたのでしよう」

次に肩章を見る。中尉殿だ。まだ童顔の若い中尉――。

「まあ、意識が戻れば、何か聞き出せるかもしれないな。針は入ったか」

「入りました」

原田が輸液パックを土門に手渡す。澤井が、すっかり慣れたような手つきでアンビユーパックのマスクを口に宛がい、ポンプをはじめた。その後、

三人がかりでストレッチャーを担ぎ、その救護所へと運ぶ。

廊下には、死体が積み上げられていた。最初は横一列に並べていたようだが空間が足りなくなつたらしく、ピラミッド状三段に死体が積み上げてあつた。手前に中国兵、奥が海兵隊員のように、全員死亡を示す黒いトリアージ・タグが足首に結ばれている。

「……原田君、全員間違いなく死んでいるんだな」

「はい、全員バイタルを確認しました。センサーでもです。脳波以外の血圧心拍で、死亡は間違いありません」

死体の山から大量の血液が流れ出た形跡はあつたが、窓から吹き込んだ雨でだいたいが洗い流されていた。

土門は中国兵が収容されている奥の部屋をちら

と覗き込むと「任せていいですか」と澤井に尋ねる。

「はい、やるべきことはわかっているつもりです」そう澤井は毅然と言った。

何にしても、外傷現場は修羅場だ。素人にはきついはずだが、彼女は頑張っていた。

手前の部屋に戻ると、LEDライトが床に転がしてあった。教室のような大きさの部屋には、負傷した海兵隊員が寝かされていた。自らも負傷している海兵隊の衛生兵が、負傷者の間を回り処置している。

「小磯班長、ここはお任せます。必要なものがあったら聞き出してください」

「医者に向かっているの？」と小磯が聞いてくる。

「南シナ海条約機構艦隊司令部に催促します。原田、集落の救護所を移す必要はあるか？」

「向こうの治療が終わったら、こちらに移動して

もらった方がいいでしょう。ここは救護所として役に立ちます。重傷者をヘリで後送する手筈は整ったようなので、移動は可能だと思います」

「わかった。ガルに調整させる」

玄関で大きな音がした。負傷兵を乗せたトタン板を担いだ兵隊が飛び込んでくる。

「メディック、メディック！」と叫んでいるのは、第三海兵師団第三偵察大隊B中隊武装偵察隊を率いるアルベルト・タイラー中尉だった。

「大佐、お宅の大尉殿をお願いします！ 意識はないが、息はまだある」

LEDライトに、血まみれの兵士が浮かび上がる。女性兵士だ。原田が隣室から飛び出してきた。

「二人残ってくれ。アンビユーバックと輸液を持つてもらおう！ 発見場所は」

「おそらく指揮所跡です。だから最初に攻撃を受けたはず」

「この状態で、何時間も生きていたのか——」

気胸特有の音がしている。銃撃は全て背後からで、臀部、鼠径部、一番酷いのは背中から入って抜けたものだろう。

すぐに戦闘服を切り裂くと、胸にはチェスト・シールが貼られ、臀部及び鼠径部には包帯が綺麗に巻いてあった。処置された上で、また戦闘服を着せられていたのだ。チェスト・シールには、それを貼った時間がマジックで書かれていた。

原田はそれを見た瞬間、この戦争には勝てそうにはないと思った。

腕のいい衛生兵がいる。人民解放軍が、兵士の救護にこれだけのエネルギーを注ぐようになったとは驚きだ。

「他に、負傷者は——」

「まだ何十人もいる。腕が千切れている程度の者は、置いてきました。瀕死の重傷者から先にと思

って」

「すぐに救急装甲車を向かわせる」

土門がそう応じ、タイラー中尉の肩を抱えるようにして部屋を出ると、玄関に向かった。

「中尉、率直な意見を聞かせてほしいが、犠牲はどの程度だと思う」

中尉は、想像もつかないという表情で首を振った。

「……二個中隊は、いたはずです。無線に応えた者は僅かで、死体はそこら中に。手当をしてくれたのは敵側——。自分が目撃しただけで、死体は一〇〇を超えます。敵兵の死体を除いて、です。おそらく全体では、三〇〇を超えるかと。生きている者は九割方負傷していて、無事な者はほほいしません」

「白旗を掲げて捕虜になった者は？」

「いるかもしれませんが、数としては僅かですよ

う。さすがにこの敵は、白旗を掲げた兵士を問答無用に射殺するようなことはしないみたいですが。大佐、車両を貸していただければ——」

「心配無い。負傷兵を発見するために、水機団がローラー作戦を開始する。君たちは引き続き、負傷兵の搬送はんそうにあたってくれ。それ用のトラックを用意させる」

突然、東の空が明るくなる。何かが発射したのがわかった。

「みんな、衝撃波がくる——！」

土門が叫び終わる前に、衝撃波が襲ってきた。

幸い、窓の類は全て撃ち破られた後だ。積み上げられた補給物資の弾薬に火が回ったのだろう。

「損失は、数千トンだな……」

解放軍の作戦目標は、あくまでも積み上げられた補給物資の破壊であり、海兵隊との交戦はおまけみたいなものなのだろう。

「海口攻略は、しばらくお預けでしょうね」

「急ぐことはない。まずは……足場を固めるべきだったのかもな」

中尉がストレッチャーや救急セットを抱えた部下を連れて去っていくと、小磯が出てきた。

「こんな数の死体の山を見るなんて、もう二度と無いような気がするわね。ま、二度とご免だけども米中、双方で一〇〇人は超えています。この遺体はどうするの？ 自家発電装置を使っても、遺体の冷蔵なんて無理でしょう」

「そういう話なら、おそらくベトナムの協力が得られます。中国人の負傷兵とともに死体袋を海岸まで運び、ハノイへ運べばいいんです。別に空路でも構いません。ベトナムは、一応はSATO艦隊に協力しているが、中国と正面から事を構える気は無いし、中国も今、ベトナムと小競り合いを行う暇など無い。ベトナムは中立国として振る舞

い、負傷兵も遺体もそれなりの礼を尽くして引き取ってくれるはずです」

「ねえ、土門さん。あなたはそんな心配りができて作戦立案も完璧なのに、どうしてまだ一佐なの？ 本来なら水機団長どころか、中央即応集団の司令官くらいやっていてもおかしくないのに」

「勘弁してください。女辻参謀に引き立てられても、ろくな事にはならんでしよう。私は防大出でもないし、それに、出世したらこの部隊を手放さなきゃならん。まあ、隷下部隊として残りはしてもね。今の地位で十分満足してます。それに、うちの部隊の特殊たる所以は、幹部が定期異動から解放されることです」

「司馬さん呼び戻せばいいじゃない？」

「彼女は……。これまで、自分という事務処理能力に秀でた同僚がいたから部隊は回っていたんです。自分は、前任者のように総理大臣決裁で定年

延長をしてもらって、七〇歳まで居座りますからね」

「それも悪くはないわね。私が事務次官に出世したら、電話一本で特殊部隊をこき使える」

「……それはそれで、悪夢ですが」

「それで、この状況をどう見ますか？」

土門は「この状況」という意味を瞬時に察し、応えた。

「ここだけの話、ヴァンペルト中將の解任は不可避でしょう。致命的なミスがあったわけではないし、基地内のトンネルから敵が湧いて出るなんてのは予測不可能でした。しかし二個中隊が潰滅し、補給物資も失ったという事実は重い。ホノルル奪還にしても、海兵隊には何一つ良いところが無かった。これが陸軍なら、クラッシュヤー・キングでも乗り込んでくるのでしょうが」

「そうねえ……。あ、そうそう！ 明るくなった

ら、ドローンで撃破した韓国軍戦車の残骸を撮影

させてくださいな」

「またよからぬ企みですか？」

「中国では、香港のためならともかく、こんな金持ちしか来られないリゾート・アイランドのために、一人っ子の兵士たちを無駄死にさせるなどいう声が大きくなっていると聞きます。それを後押しして、中国全土に厭戦気分を蔓延させる。できれば、韓国にもね」

「気をつけてくださいよ。彼女のコラムは、今はネットで人気だが、世論の風向きなどあつという間に変わる。油断しないことです」

「そうね。でも今のところ、官邸はご機嫌のようよ。あんな素人ママさんの記事で、国民がころつと転ぶなんて思わなかった、って」

暗がりから部下たちが現れる。まず斥候が二名、独特の符牒でクリッカーを鳴らしながら現れ、

続いて本隊が現れた。

サイレント・コアのもう一個小隊を率いる姜彩夏三佐だ。

「あら、姜さん。もう大丈夫なの？」と小磯が聞いた。

小磯の負傷は、彼女と行動をとみにしていた時に負ったものだ。小磯はただ震えて痛みに耐えるだけで済んだが、敵に包囲された中で部隊を指揮して一晚耐えた姜は、軽い心的外傷後ストレス障害に陥っていた。

「さあ、どうでしょう。班長は、お怪我の具合はどうですか」

「まだじんじん痛むわよ。ロキソニンを飲んで耐えています。あなたにはしつかりしてもらわないと、香港から司馬さん呼び戻す羽目になるから」

姜は、わかっていると頷いた。

「——報告します。滑走路東側に展開した水機団中隊は、負傷者を探しつつこちら側へ移動しています。水機団が抜けた後は、スキャン・イーグルでくまなく監視しています」

「タイラー中尉を手伝ってやれ。まだそこらに負傷兵が転がっている。解放軍は、敵味方区別なく負傷兵を手当てしてくれたい。だから、われわれも区別することなく負傷兵を救う。周囲の建物に、まだ留まっているはずだ。ただし、敵の襲撃には最大限注意しろ。どこから現れるかわからんからな。トンネルの出口については、今は探す必要は無い。明るくなつてからだ」

「了解です。荷物を置く場所がありますか」

姜は、小磯らと乗ったヘリが撃墜されて立て籠もる羽目になった経験から、武器弾薬は余計に持ち運ぶようになっていた。今は、組み立て式のリヤカーも引張っている。

「ブッシュユマスター指揮車にくくりつけておけ。あれなら誰も盗もうなんて思わないだろう」

「敵は、もう仕掛けてこないでしょう。天候も回復する一方ですし、部隊行動をとった途端、空からの攻撃を受ける」

「俺もそう望みたいが、海兵隊本隊が戻ってくるまでは油断するな」

負傷兵を救出するための海兵隊のオスプレイが着陸してきた。当初は、引き返す海兵隊本隊を運ぶために向かっていたオスプレイだが、あまりにも多い負傷兵の後送を優先するということで、滑走路西側のエプロンへと着陸してきたのだ。

滑走路上は爆発炎上した補給物資の破片が飛び散っていたため、今は完全に閉鎖（へいさ）されている。復旧には、また半日はかかるだろうと思われていた。それも燃えさかっている補給物資のコンテナが鎮（ちん）火すれば、だが。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。